

縄文時代住居跡の出入り口

-青森県の事例を中心として-

成田滋彦

1 はじめに

現代において家を新築する際に、玄関を西側にとかトイレは南側に設置してはいけないという家相学というものが、いまだ一部に存在しています。

また、アイヌ民族の家屋の建て方は、神窓を川上方向及び東側に設置し、川下には出入り口部を設ける(更科1968)という規則性がみられます。

そこで、縄文時代においては住居跡の出入り口の設置に一定の規制が存在していたのか、それとも無かったのか、縄文時代の住居の出入り口の構造や方位について、青森県内の資料を用いて、論考してみたいと思う。

県内の遺跡で、出入り口部構造を検出した1. 大面遺跡(成田1980)・2. 十腰内(1)遺跡(赤羽・神1999)・3. 神明町遺跡(杉山1980)・4. 牛潟(1)遺跡(新谷1991)・5. 尻高(4)遺跡(岡田1985)・6. 三内丸山遺跡(小笠原1998)・7. 水木沢遺跡(古市・市川・大湯1977)・8. 裏川遺跡(葛西・児玉1992)・9. 大石平遺跡(成田1985)・10. 上尾駒(2)遺跡(畠山・岡田1988)・11. 富ノ沢(2)遺跡(畠山・中嶋1992)・12. 古屋敷貝塚(鈴木1986)・13. 丹後谷地遺跡(藤田・宇部・村木・小笠原1986)・14. 田面木平遺跡(1)(藤田・宇部・村木1988)・15. 丹後平(2)遺跡(宇部1988)・16. 風張(1)遺跡(藤田・宇部・小笠原・村木1991)・17. 坂中遺跡(小笠原1995)・18. 弥次郎窪遺跡(遠藤1990)・19. 野場(5)遺跡(畠山・成田・三浦1993)・20. 鶴窪遺跡(福田1983)・21. 沢堀込遺跡(木村1992)・22. 右工門次郎窪遺跡(相馬1982)の22の遺跡を用いて住居跡の出入り口部の分析を行いたいと思う。

2 住居跡の出入り口部の認定

住居跡の出入り口は、報告書の記述をみるとピットの間隔がひろい箇所や、床面の固い部分を出入り口としてる報告書もみられるが、固さのみで出入り口と判断することは、発掘調査及び技量の差もあり出入り口として誤解する点もあるため、出入り口としては認定しない。

そこで本論では、地山等を用いて段を有するもの、張り出し部をもつもの溝及びピット等を用いて住居跡の内外に構築しているものなどを出入り口施設として認定した。

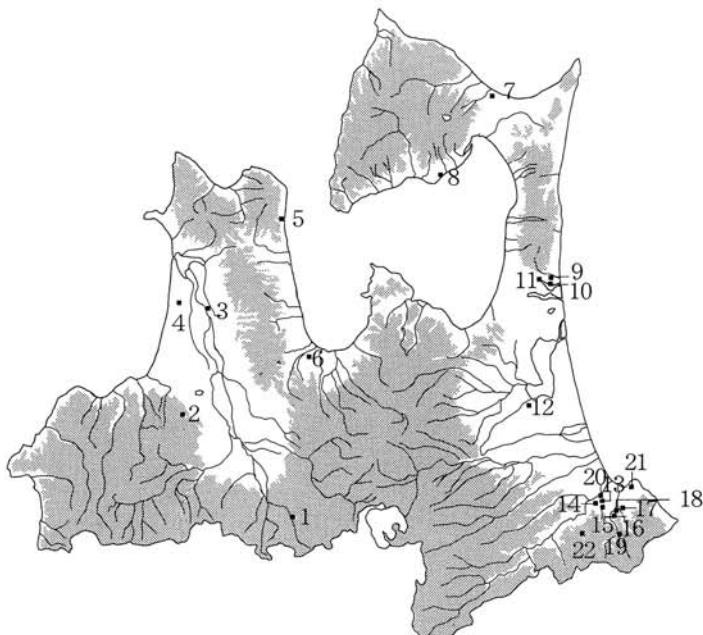


図1 遺跡位置図

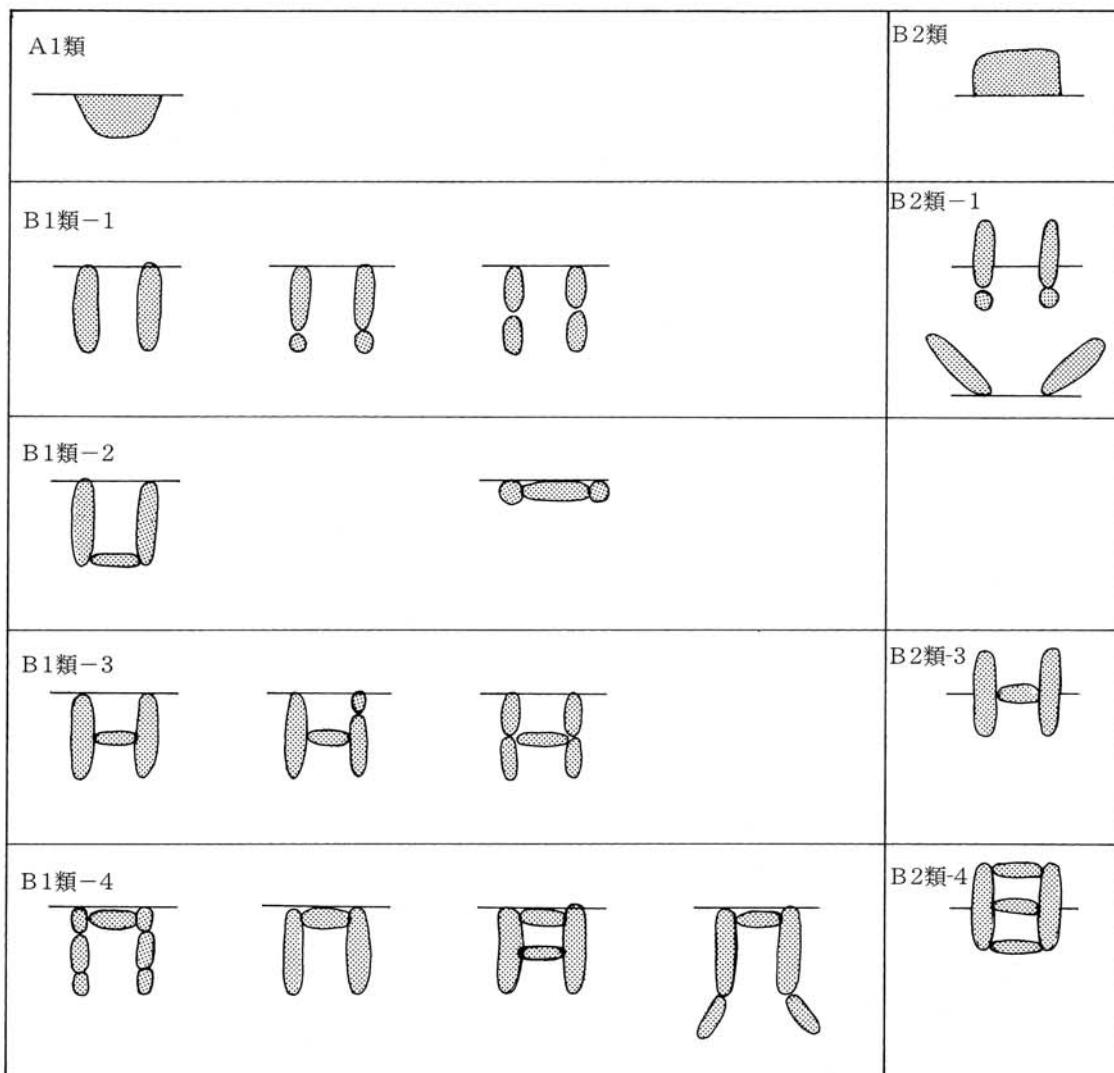


図2 出入り口部の構造

なお、溝及びピットを持つ施設は石野氏(石野1995)が『…階段があったとすれば階段の裾をとめた小さな柱穴…』と指摘しているように筆者も両脇に溝及び小ピットを有するものを階段の裾の部分であると理解した。

3 出入り口部の構造(図2)

この施設は構造から、段をもって構築しているもの(A類)・溝及びピットで構築している(B類)と二つに大きく分類した。

また、屋内に位置しているものをI型、屋外及び住居跡の内と外に位置しているものをII型に分け、B類は構造にバラエティーがあるため、1~4と更に細分して分類している。

A類 段及び張り出しをもつ構造のもの(図2)

段をもつA1類は、形態が楕円形・方形を呈する。野場(5)遺跡(畠山他1993)の第26号住居跡、弥次郎窪遺跡(遠藤1990)の第2号竪穴住居跡は、住居跡の側縁部に出入り口が設置しているが、他は端部に位置している。

縄文時代住居跡出入り口一覧表

大面遺跡（成田滋彦1980）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第10号住居跡	A 1類	25×57	N-50°-W	無	3.1×4.3(9.54m²)	前期(円筒下層b式)	

神明町遺跡（杉山式1980）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第5号住居跡	B 1-4類	84×106	N-90°-E	84	6.3×7	後期(十腰内Ⅲ式)	信仰的な施設

鶴窪遺跡（福田友之1983）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第1号堅穴住居跡	B 1-1類	55×73	N-115°-E	31	3.94×3.73	後期(十腰内Ⅰ式)	焼失家屋

尻高(4)遺跡（岡田康博1985）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第2号堅穴住居跡	B 1-4類	80×85	N-150°-W	65	4.4×5.4(18.3m²)	後期(十腰内Ⅳ式)	
第3号堅穴住居跡	B 1-1類	40×80	N-162°-W	110	3.8×3.9(12m²)	後期(十腰内Ⅳ式)	
第6号堅穴住居跡	B 1-1類	165×105	N-153°-W	85	7.6×8.1(45.6m²)	後期(堂林式)	板状の炭化材出土

大石平遺跡（成田滋彦1985）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第2号堅穴住居跡	A 1類	73×55	N-118°-E	67	2.3×2.7(4.2m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	
第5号堅穴住居跡	B 1-1類	98×110	N-40°-E	37	3.7×4.2(11.5m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	
第8号堅穴住居跡	B 1-2類	67×98	N-130°-E	110	4×5(13.1m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	

古屋敷貝塚（鈴木克彦1986）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第5a号遺構	A 2類	91×84	N-70°-W	無	3×3.83	前期(円筒下層d式)	壁面から埋没土器
第7号遺構	A 2類	70×56	N-90°-E	無	4.16	時期不明	

弥次郎窪遺跡（遠藤正夫1990）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第2号堅穴住居跡	A 1類	54×96	N-30°-E	60	3.3×4.1(10.67m²)	後期(牛ヶ沢式)	

上尾駒(2)遺跡（畠山昇・岡田康博1988）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
CJ 6 A号堅穴住居跡	B 1-1類	140×90	N-130°-E	35	3.86×4.3(13.2m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	袖部から埋設土器
CJ 102号堅穴住居跡	B 1-1類	75×110	N-178°-E	30	3.85×3.95(9.8m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	

丹後平遺跡(2)（宇部則保1988）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第5号堅穴住居跡	B 1-3類	79×115	N-152°-E	73	4.6×4.75(14.4m²)	後期(十腰内Ⅱ・Ⅲ式)	ピットから板状の炭化材
第8号堅穴住居跡	B 1-3類	79×110	N-48°-E	115	6.5×6.8(30.5m²)	後期(十腰内Ⅲ式)	
第10号堅穴住居跡	B 1-1類	42×85	N-135°-E	145	5×5(21m²)	後期(十腰内Ⅱ・Ⅲ式)	
第11号堅穴住居跡	B 1-1類	67×85	N-147°-E	61	3.8×4(10.2m²)	後期(牛ヶ沢式)	炉と出入口の間が踏み固めている

田面木平(1)遺跡（藤田亮一・宇部則保・村木淳1988）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第4号堅穴住居跡	B 1-2類	73×85	N-114°-E	67	3.75×4.1(10.5m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	P 1とP 2の間が固い
第5号堅穴住居跡	B 1-1類	43×98	N-98°-E	67	3.26×3.76(8.4m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	
第6号堅穴住居跡	B 2-4類	104×80	N-93°-E	31	3.4×3.5(8m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	
第33号堅穴住居跡	B 1-1類	37×55	N-82°-E	31	3.15×3.15(6.2m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	

右エ門次郎窪遺跡（相馬信吉1982）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第3号住居跡	B 2-1類	30×111	N-135°-E	42	2.9×2.6(5.8m²)	晩期(大洞C 2式)	

丹後谷地遺跡（藤田亮一・宇部則保・村木淳・小笠原善範1986）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m²)	時期	備考
第20号堅穴住居跡	B 1-2類	146×153	N-121°-E	116	6.6×7.3(31.6m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	
第22号堅穴住居跡	B 1-4類	92×128	N-102°-E	85	6.6×6.9(32.4m²)	後期(十腰内Ⅱ式)	
第23号堅穴住居跡	B 1-4類	116×110	N-100°-E	67	5.6×5.8(22.5m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	
第24号堅穴住居跡	B 1-3類	98×122	N-127°-E	92	5.9×6.6(30m²)	後期(十腰内Ⅱ式)	
第28号堅穴住居跡	B 1-2類	73×85	N-102°-E	55	3.5×3.5(10.9m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	
第32号堅穴住居跡	B 1-3類	85×116	N-153°-E	79	4.9×5.6(19.9m²)	後期(十腰内Ⅱ式)	
第34号堅穴住居跡	B 2-3類	55×79	N-130°-E	128	4.2×4.36(12.5m²)	後期(十腰内Ⅱ式)	
第35号堅穴住居跡	B 1-1類	37×122	N-152°-E	103	4.5×5.1(14.2m²)	中期(最花式)	
第36号堅穴住居跡	B 2-1類	67×98	N-135°-E	55	3.46×4(9.5m²)	後期(十腰内Ⅰ式)	
第42号堅穴住居跡	B 2-1類	146×110	N-103°-E	37	5.6×6.2(22.5m²)	中期(大木10式併行)	溝の末端に疊2個

第45号竪穴住居跡	B 2 - 3 類	67×110	N-152°-E	79	3.3×3.3(7.4m ²)	後期(十腰内 I 式)	
第46号竪穴住居跡	B 1 - 1 類	67×92	N-91°-E	153	5.9×6.5(25.8m ²)	後期(十腰内 IV 式)	
第48号竪穴住居跡	B 1 - 4 類	79×134	N-68°-E	85	7.4×8.4(42.4m ²)	後期(十腰内 IV 式)	
第49号竪穴住居跡	B 1 - 2 類	37×55	N-156°-E	67	2.7×2.9	後期(十腰内 II 式)	
第54号竪穴住居跡	B 1 - 1 類	104×98	N-82°-E	12	4.5×4.5(13.5m ²)	後期(十腰内 II 式)	

沢堀込遺跡（木村鉄次郎1992）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
C-10号住居跡	A 1 類	70×35	N-157°-E	無	3×3.5	前期(早稻田 6)	

富ノ沢(2)遺跡（畠山昇・中嶋友文1992）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第10号住居跡	A 1 類	144×36	N-240°-E	180	3.9×4.4(12.8m ²)	中期(円筒上層 e 式)	
第276号住居跡	A 1 類	168×102	N-200°-E	168	15.5×7.3(76.5m ²)	中期(円筒上層 e 式)	

水木沢遺跡（古市豊司・市川金丸・大湯卓二1977）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第1号竪穴住居跡	A 2 類	112×144	N-138°-E	264	7.3×8.9(49.3m ²)	後期(十腰内 V 式)	
第5号竪穴住居跡	A 2 類	120×176	N-82°-E	200	6.8×6	後期(十腰内 V 式)	
第8号竪穴住居跡	A 2 類	140×135	N-90°-E	288	6.2×5.2(27m ²)	後期(十腰内 V 式)	
第9号竪穴住居跡	A 2 類	82×126	N-38°-E	164	6×6(32.2m ²)	後期(十腰内 V 式)	
第17号竪穴住居跡	A 1 類	60×70	N-160°-E	165	5.25×6(26.4m ²)	前期(円筒下層 d 式)	
第19号竪穴住居跡	A 1 類	50×45	N-130°-E	163	4×4.12(14.2m ²)	前期(円筒下層 d 式)	

野場(5)遺跡（畠山昇・三浦孝仁・成田悟1993）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第4号住居跡	B 1 - 1 類	225×170	N-126°-E	25	5(10.6m ²)	中期(最花式)	
第11号住居跡	B 1 - 2 類	85×50	N-88°-E	175	7.5×9.98(57m ²)	中期(最花式)	大形住居
第26号住居跡	A 1 類	125×70	N-195°-E	135	3.4×3.78(9.5m ²)	中期(大木10式併行期)	

坂中遺跡（小笠原善範1995）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第3号住居跡	B 1 - 1 類	61×79	N-130°-W	37	3.26×3.42	後期(十腰内 I 式)	
第4号住居跡	A 2 類	31×85	N-25°-E	無	(2.9m ²)	後期(十腰内 I 式)	

十腰内(1)遺跡（赤羽真由美・神康夫1999）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第3号竪穴住居跡	B 1 - 1 類	90×80	N-50°-E	500	13×13(136.16m ²)	晚期(大洞 B C 式)	大形住居跡

三内丸山遺跡（小笠原雅行1998）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第181号住居跡	B 1 - 1 類	70×55	N-88°-E	80	3.1×3.34(4.81m ²)	中期(円筒上層 e 式)	

風張(1)遺跡（藤田亮一1991・小笠原善範・村木淳1991）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第9号竪穴住居跡	B 1 - 3 類	91×103	N-50°-W	97	(5.32)	後期(十腰内 IV 式)	
第13号竪穴住居跡	B 1 - 3 類	67×97	N-60°-W	79	5.1×6.2	後期(十腰内 IV 式)	
第15号竪穴住居跡	B 1 - 3 類	79×110	N-180°-E	97	5.07×6.55	後期(十腰内 V 式)	合掌土偶出土
第16号竪穴住居跡	B 1 - 1 類	36×67	N-176°-W	115	3.62×4.1	後期(十腰内 V 式)	
第20号竪穴住居跡	B 1 - 1 類	67×97	N-141°-E	127	6.08×8.32	後期(十腰内 IV 式)	
第25号竪穴住居跡	B 1 - 1 類	42×103	N-34°-W	140	6.05×7.27	後期(十腰内 V 式)	
第27号竪穴住居跡	B 1 - 1 類	30×91	N-57°-W	18	5×5.87	後期(十腰内 V 式)	
第28号竪穴住居跡	B 1 - 4 類	91×73	N-20°-W	?	(5.2)	後期(十腰内 IV・V 式)	
第29号竪穴住居跡	B 1 - 2 類	55×73	N-146°-W	49	4.68×5.84	後期(十腰内 V 式)	
第35号竪穴住居跡	B 1 - 4 類	61×79	N-170°-W	97	4.71×4.92	後期(十腰内 IV 式)	
第37号竪穴住居跡	B 1 - 1 類	72×85	N-176°-E	85	4.7×5.1	後期(十腰内 IV 式)	
第4号竪穴住居跡	B 1 - 3 類	49×104	N-105°-W	201	5.5×6.2	後期(十腰内 IV 式)	
第6号竪穴住居跡	B 1 - 4 類	110×146	N-135°-W	146	5.87×7.14	後期(十腰内 IV 式)	
第50号竪穴住居跡	B 1 - 4 類	67×98	N-144°-E	120	5×5	後期(十腰内 V 式)	

蓑川遺跡（葛西勵・児玉大成1992）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第1号竪穴遺構	A 1 類	42×60	N-47°-W	120	7.16×8.8	前期(円筒下層 c 式)	

牛潟(1)遺跡（新谷雄蔵1991）

遺構名	分類	長さ×幅(cm)	方位	炉との距離	住居跡の規模(m ²)	時期	備考
第3号住居跡	A 2 類	70×180	N-172°-W	?	6×6.2	前期(円筒下層 d 式)	

張り出しをもつA2類は、形態が方形・楕円形を呈する。底面は段を有するものが主体を占めるが、古屋敷貝塚(鈴木1986)の第5a号遺構は底面がスロープ状を呈している。出入り口部は住居跡の側縁部に位置している。

B類 溝及びピットをもつ構造のもの(図2)

本類は、構造の形態差から1~4種と更に細分される。

B1類-1・B2類-1(二条の溝のものである。)

住居跡における位置は、屋内と屋外に位置している。

溝のタイプのもの、溝と末端にピットをもつタイプのもの、ピットの連続のタイプのものがあり、類型の中では一番多く検出されるタイプである。

上尾駿(2)遺跡(畠山・岡田1988)のCJ-6号竪穴住居跡では、ピットの末端部に埋設土器を有する。

尻高(4)遺跡(岡田1985)の第6号住居跡は、長さが165cmを測り、大石平遺跡(成田1985)の第5号住居跡は幅が110cmを測り、本類型の中でも最長を測る。

B1類-2(「L」字型のものである)

本類型は屋内のみに存在するものである。

二条の溝の末端を横に連結した「L」字形の形態をなすものを、本類型とした。風張(1)遺跡(藤田1991)の第29号住居跡は末端部が連結せずに「L」形を呈するものである。

野場(5)遺跡(畠山他1993)の第11号住居跡は、長さが85cmを測り、大石平遺跡(成田1985)の第8号竪穴住居跡は、幅が98cmを測り本類型の中で最長を測る。

B1類-3・B2類-3(H字型のものである。)

本類型は、屋内と屋外に存在するものである。

二条の溝及びピットの中央部を横に連結したH字形を呈するものを本類型とした。

屋外のB2類は、丹後谷地遺跡(藤田他1986)の第34号竪穴住居跡である。本類型の出入り口は壁に接して構築されているのが主体であるが、風張(1)遺跡(藤田1991)の第13号竪穴住居跡で壁より48cm、丹後谷地遺跡(藤田他1986)の第24号竪穴住居跡で壁より24cm離れて構築している。

丹後谷地遺跡(藤田他1986)の第24号竪穴住居跡は、長さ98cm・幅122cmを測り本類型の中でも最長を測る。

B1類-4・B2類-4(「匁」字型・鳥居型・日字状型のものである。)

本類型は屋内と屋外に存在するものである。屋外のB2類は田面木平(1)遺跡(藤田他1988)の第6号竪穴住居跡1軒である。

構造は、二条の溝及びピットを横に連結した「匁」字型のタイプが主体で、「匁」字型の中でも末端が広がるもの風張(1)遺跡(小笠原・村木1991)の第6号住居跡もみられる。また、横に二条の溝を連結した鳥居型のタイプ、日字状型のタイプの3種類が確認される。

丹後谷地遺跡(宇部1988)の第23号住居跡は長さ116cmを測り、風張(1)遺跡(小笠原・村木1991)の第6号住居跡は幅146cmを測り、本類型の中で最長を測る。

4 出入り口部の変遷

出入り口部の構造を各時期毎に把握する。現在、出入り口部構造がわかるのは縄文時代前期からであり、縄文時代早期の段階では検出していない。

—縄文時代前期—

【A1類・A2類を検出している】

県内で最も古い出入り口の施設は、沢堀込遺跡(木村1992)のC-10号住居跡であり、時期は前期初頭期の早稻田6類である。構造はA1類の屋内に段を有する構造である。なお、屋外の張り出しをもつものは、古屋敷貝塚(鈴木1986)の第5a号遺構であり、前期(円筒下層d式)から構築される。

前期は、A類のみの検出であり、住居跡の壁寄りにステップ状に段を有するタイプが主体を占める。

—縄文時代中期—

【A1類・B1類ー1類・B1ー2類を検出している】

中期の段階では、A1類の屋内に段を有する構造が、前段階の前期から引き継がれており、その構造は類似している。A2類の屋外の構造はみられない。

なお、この時期にいたってB1類ー1が出現する。野場(5)遺跡(畠山他1993)の第4号住居跡、三内丸山遺跡(小笠原1998)の第181号住居跡であり、ピット及び溝の間が落ち込む構造を呈している。構築時期は野場(5)遺跡が最花式、三内丸山遺跡が円筒上層e式であり、中期中葉～後葉の時期にB1類が出現すると思われる。

—縄文時代後期—

【A1類・A2類・B1ー1類・B1ー2類・B1ー3類・B1ー4類・B2ー1類・B2ー3類・B2ー4類と分類したすべての出入り口を検出している。】

後期は、県内で検出した出入り口施設の75%を占めており、出入り口施設が多く作られる時期である。

後期初頭の牛ヶ沢式では、A1類とB1ー1類を検出している。

十腰内I式では、B1ー3類を除きすべて検出しており、B1類の屋内の施設を盛んに構築する時期である。また、屋外のB2類も十腰内I式の時期に限定される。

A ₁				
A ₂				
B ₁ -1				
B ₁ -2				
B ₁ -3				
B ₁ -4				
B ₂ -1				
B ₂ -3				
B ₂ -4				

前 期 中 期 後 期 晩 期

図3 出入り口部変遷図

十腰内IV・V式は、B1類の屋内施設を構築するとともに、水木沢遺跡(古市他1977)で検出したA2類の屋外の張り出しタイプの出入り口部も構築されている。

—縄文時代晚期—

【B1-1類・B2-1類を検出している。】

十腰内(1)遺跡(赤羽・神1999)の第3号竪穴住居跡のB1-1類と、右工門次郎窪遺跡(相馬1982)の第3号住居跡のB2-1類の2軒である。

とくに右工門次郎窪遺跡の出入り口は、ハの字状に広がる施設であり、県内に類例がみられず、関東地方の出入り口施設の構造と類似している。

5 出入り口と炉との関係(図4)

出入り口と炉は、基本的に住居内においては、直線上の配置が基本である。一方、大石平遺跡(成田1983)の第2号竪穴住居跡・水木沢遺跡(古市他1977)の第19号竪穴住居跡は、直線上の配置ではなく斜位に配置している。特にA1類の出入り口施設によくみられる。

各時期毎に概観すると、縄文時代前期では類例が少ないが150cm前後に集中する。縄文時代中期では、150cm前後のグループと、50cm前後のグループの二つのグループが現れる。縄文時代後期に至っては、出入り口施設の類例が多い時期である。初頭期の牛ヶ沢式では50cmのグループのみが、十腰内I式で50cmのグループと100cm前後の二つのグループが現れる。

この二つのグループは、後期の十腰内IV・V式に至って間隔が広くなる傾向がみられる。縄文時代晩期では、2基と類例が少ないが二つのグループが存在する。

以上の事から炉と出入り口は、一体化した存在であると指摘できる。炉と出入り口の距離であるが。500cmを測る十腰内(1)遺跡(赤羽・神1999)の第3号竪穴住居跡は、大形住居跡という点から例外であるが、他の住居跡をみると住居跡規模の大小と距離は比例せず、その距離に二つのグループが存在したとという事を指摘したい。

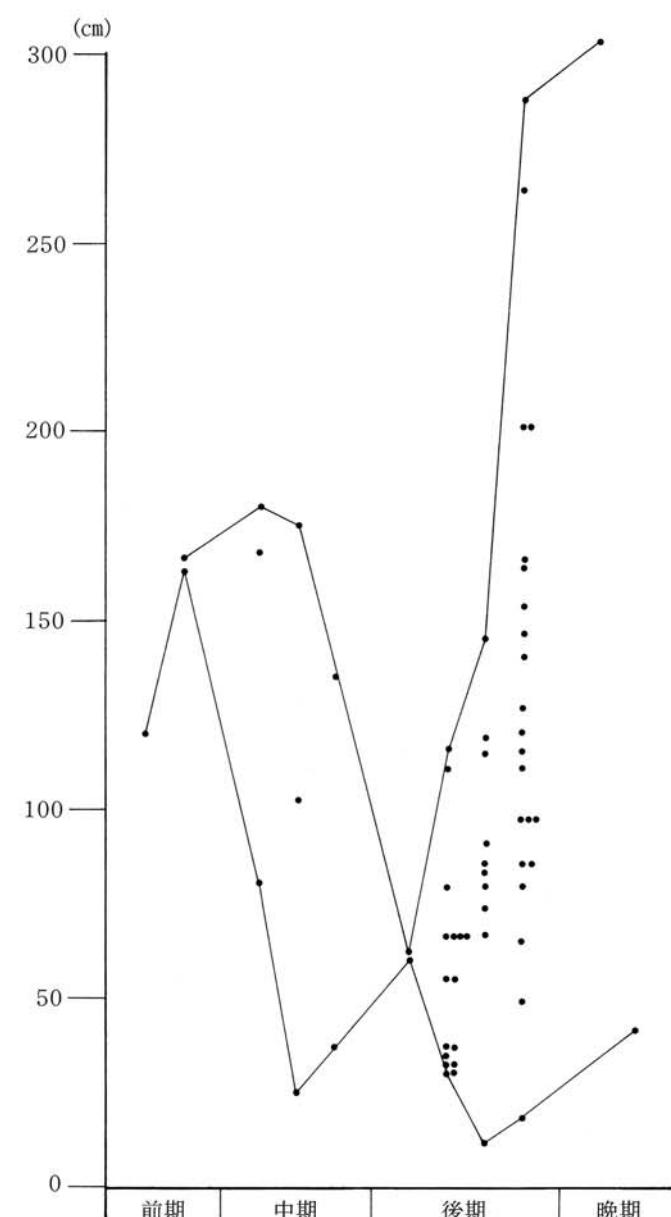
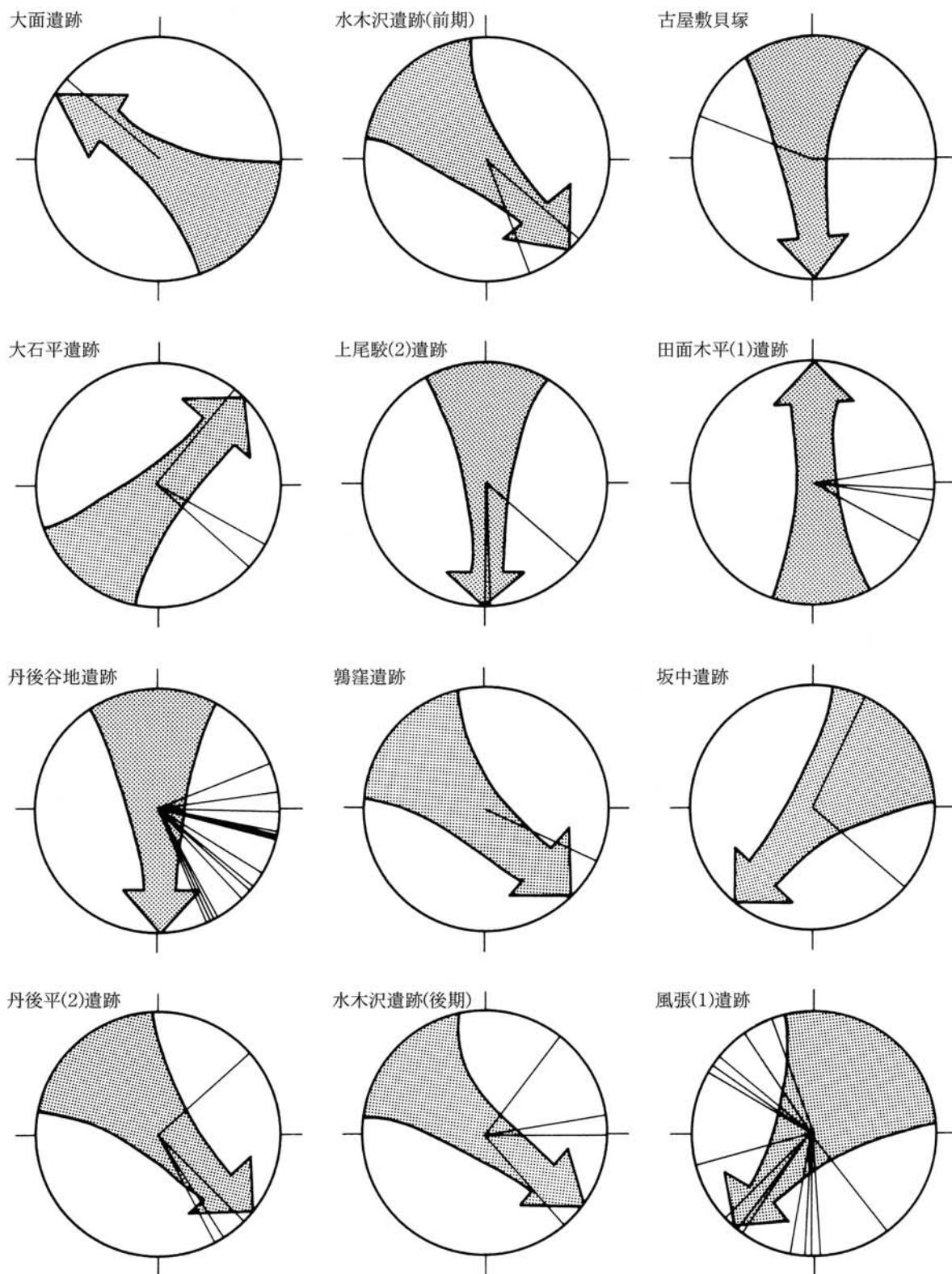


図4 出入り口と炉との距離



スクリーントーンは、台地の斜面方向
図の上が北

図5 出入り口部の方位

6 出入り口部の方位（図5）

図5は、出入り口を円グラフとしたものであり、スクリートーンは矢印部が台地斜面の下位方向を表している。

出入り口部の設置した地点をみると、北東が十腰内(1)遺跡・弥次郎窪遺跡・神明町遺跡、南東が水木沢遺跡（前期）・上尾駒(2)遺跡・田面木平遺跡・鶴窪遺跡・沢堀込遺跡・右エ門次郎窪遺跡・牛潟(1)遺跡、北西が大面遺跡、南西が富ノ沢(2)遺跡・尻高(4)遺跡、北東～南東が大石平遺跡・丹後平(2)遺跡・丹後谷地遺跡・坂中遺跡・水木沢遺跡（後期）・襄川遺跡、北東～南西が野場(5)遺跡、北西～南東が風張(1)遺跡である。

検出した出入り口を全体的に概観すると、真北はみられず北東～南東にかけて多くみられ南側を意識していると思われる。また、遺跡毎に出入り口の位置が決められるという特徴を有している。

また、台地斜面と位置を比較すると、台地斜面下位方向の風張(1)遺跡・水木沢遺跡（前期）・十腰内(1)遺跡と斜面下位方向の90°脇に存在する田面木平(1)遺跡・丹後谷地遺跡の二つのグループが存在し、その設置する位置は斜面の下位方向で南側という決められた規定が存在していたと考えられる。

7 おわりに（図6～8）

このような出入り口施設については、A類のステップ状の施設については、水木沢遺跡（古市他1977）に代表されるように1970年代から出入り口として肯定されてきた。一方、B類の溝状及びピットについては、1980年代の前半期の鶴窪遺跡（福田1983）では、積極的に出入り口としては認定しておらず、神明町遺跡（杉山1980）では第5号住居跡の出入り口について『…出入り口でなく、むしろ、信仰的な色彩の強い施設の跡と考える…』として、出入り口施設より祭祀施設として把えられていた。

その後、尻高(4)遺跡（岡田1985）の調査で第2号竪穴住居跡から『…柱穴列にはさまれた床面は、他の床面と比較すると非常に柔らかく、直接床面の上を歩いて出入りしていたとは考えられず、むしろ階段やスロープ等の施設痕と考えるべきであろう…』として、出入り口施設として認識し、第6号竪穴住居跡から『…2列の柱穴列に渡るように床面から板状の炭化材が出土した…』としている。このことから、B類は出入り口施設として認定すべきであると考えられ、1985年代からB類の施設を出入り口と認定してきた。

A類のステップは、青森県では大面遺跡（成田1980）の第10号住居跡の円筒下層b式からであるが、宮本氏（宮本1980）は、北海道で縄文時代早期の住居跡から出現するとしており、本県の場合も前期から出入り口施設が構築されたというより、早期の段階までさかのぼる可能性がある。

B類の施設に関しては、林氏（林1997）は、伊勢堂岱遺跡の環状列石はハの字形出入り口をもつ住居と類似し、その時期を中期～後期初めとしているが、本県のハの字形出入り口をもつものは、右エ門次郎窪遺跡（相馬1982）の第3号住居跡の縄文時代晩期1軒のみであって、伊勢堂岱遺跡の環状列石と関連があるかは疑問である。

ただし、伊勢堂岱遺跡の環状列石を形成する十腰内I式の集落で、多くの出入り口施設の住居を作ることは事実である。

今回は、各時期毎の詳細な分析はできなかったが、武藤氏は縄文時代中期の住居跡で検出される特殊施設について出入り口として考えており、特殊施設内のピットを『…上屋中位に設けられた出入り口に連結して丸太梯子等を据えた昇降施設の可能性が考えられる…』（武藤1997）としている。

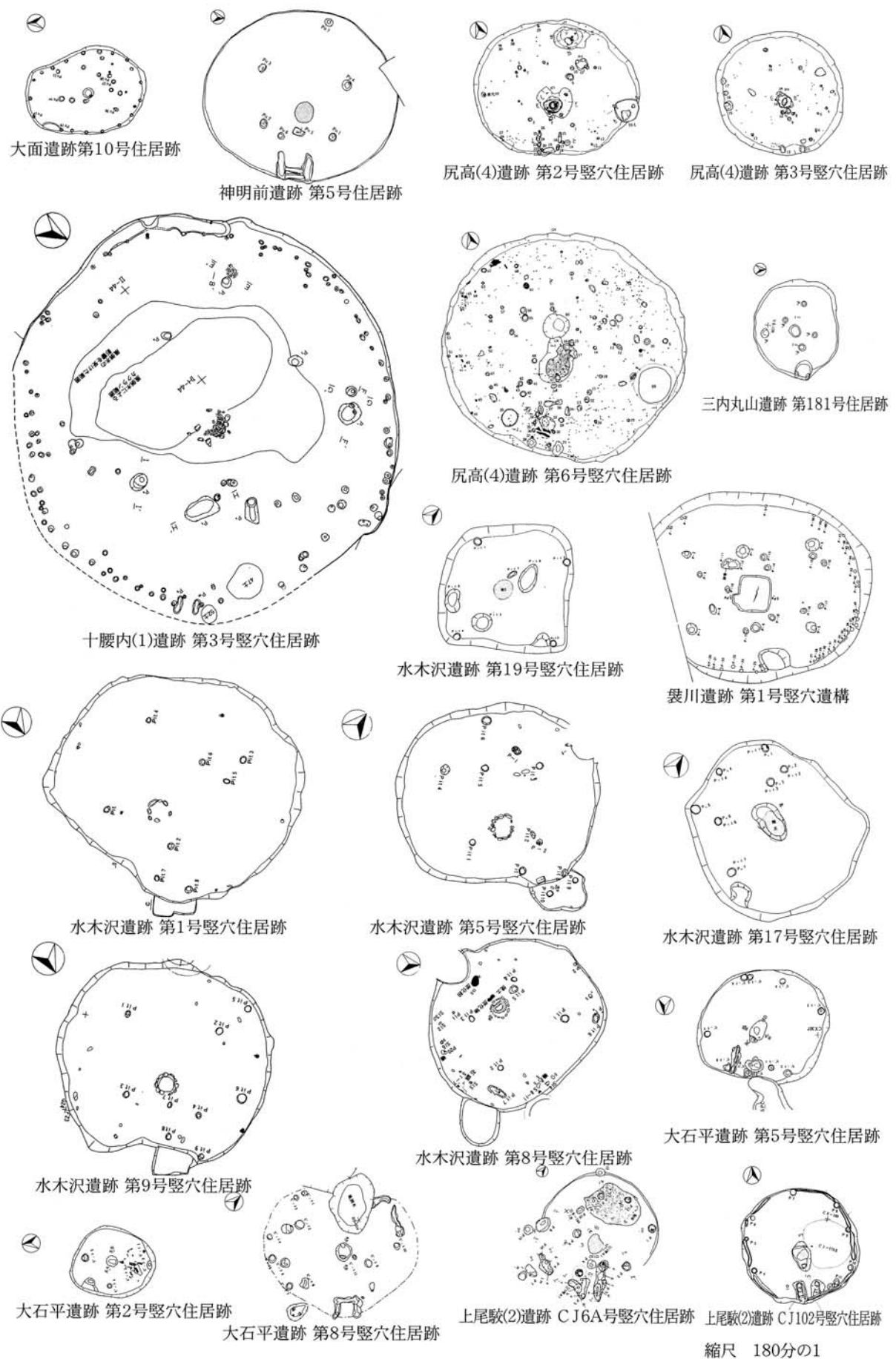


図6 住居跡集成（1）

縮尺 180分の1

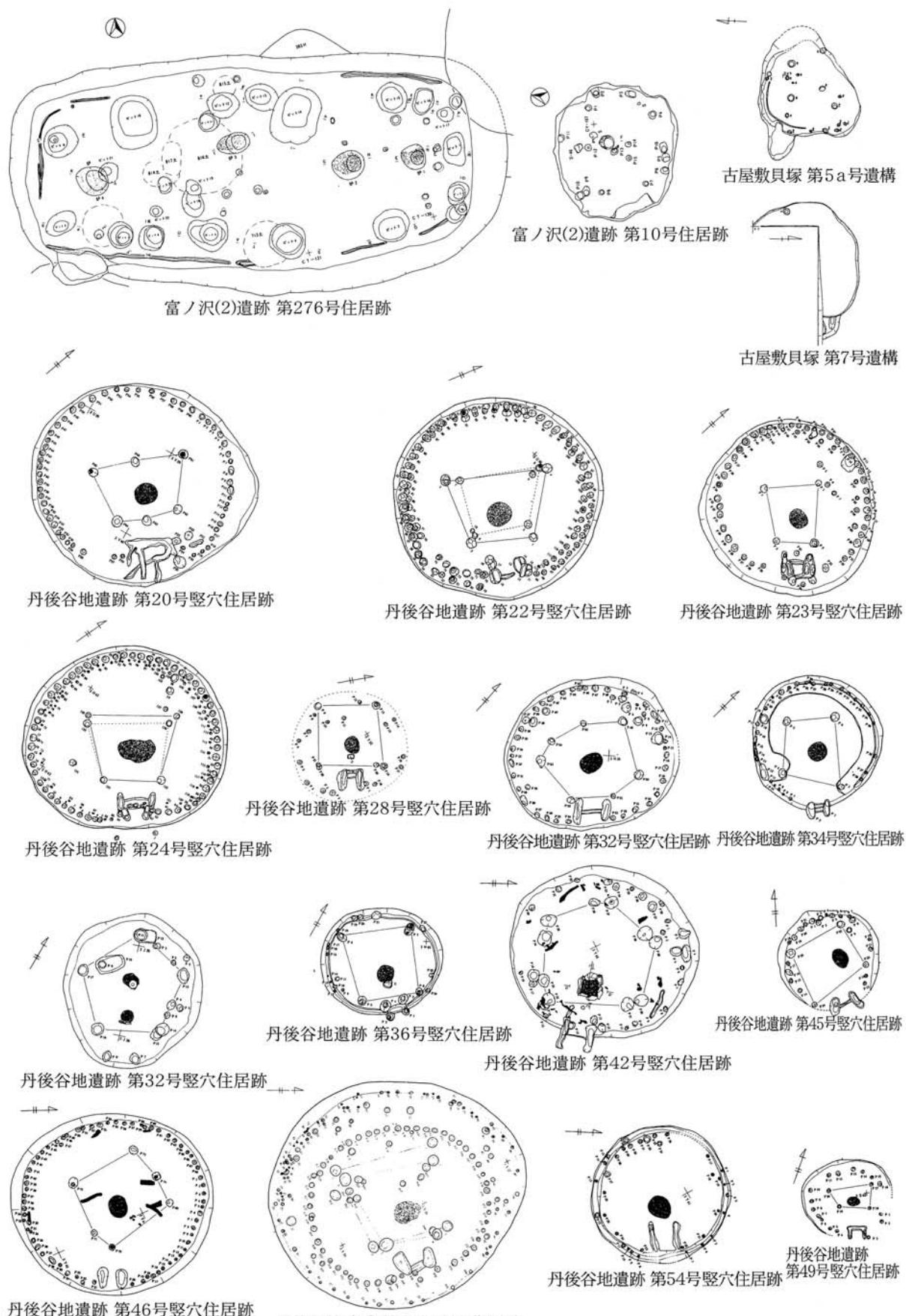
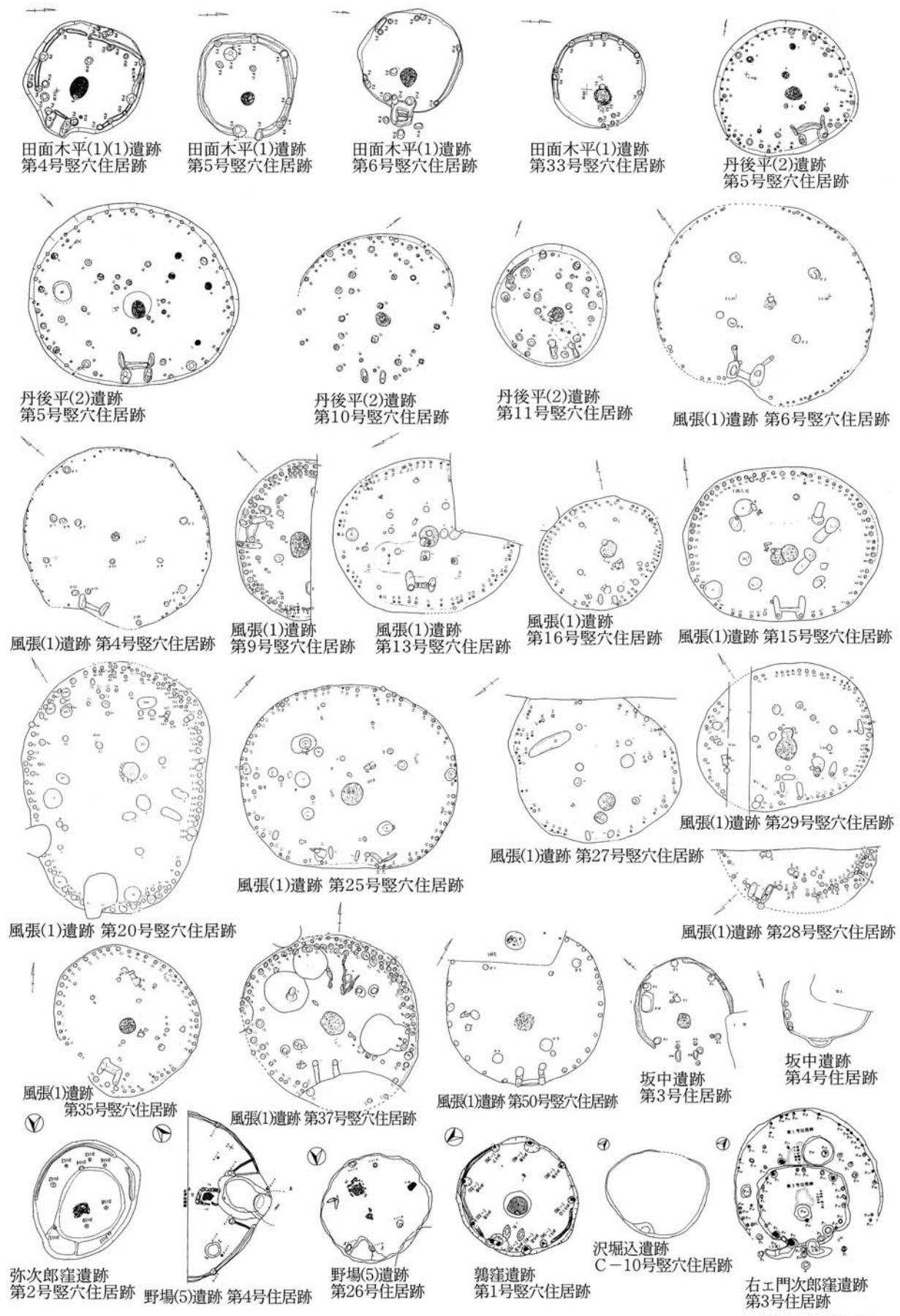


図7 住居跡集成（2）

縮尺 180分の1



縮尺 180分の1

図8 住居跡集成（3）

この特殊施設に関しては、畠山氏(畠山1993)が富ノ沢(2)遺跡の特殊施設を分析して、祭祀施設として把らえており、筆者も同様に考えている。

しかし、中期の住居跡の出入り口構造は、B類の遺構が明確でない点や、出入り口施設が少ないとなど、中期の住居跡の出入り口について特殊施設も含めて再検討する必要があると思われる。

今回の集成にあたって出入り口施設をもつ住居跡の特徴として、富ノ沢(2)遺跡第276号住居跡・十腰内(1)遺跡第3号住居跡の大型住居跡や、風張(1)遺跡の第15号住居跡では出入り口の奥壁から合掌土偶が出土している点などがあげられるが、それほどの住居跡の特徴を提示できない。

最後に出入り口施設は、集落内の住居跡のすべてに存在する訳ではなく、出入り口施設を有する住居跡と無い住居が遺跡内で存在する。

つまり、集落の住居構造はすべて一定ではなく、住居の変化は社会集団の中での変化が存在していたことを意味するのではないか。この事は、縄文時代後期に至って環状列石の出現・呪術遺物の増加・再葬墓の発展など、縄文時代の変革期であり、このような社会現象の中で出入り口施設も増加しており、社会の変革期と出入り口施設とになんらかの接点があったと思われる。

注

- 注1 石野氏(石野1995)は住居跡内の床面の固さで出入り口部を想定しているが、出入り口の中央部は階段等の施設があった為に軟らかく、固さだけという感覚的な判断は危険である。
- 注2 床面が一段高いベット状遺構及びテラス状遺構と呼ばれたものについては、筆者は出入り口としては認定していない。
- 注3 本論では、縄文時代中期の検出例を詳細に分析していない。また、三内丸山遺跡の復元家屋は出入り口が北側と西側の二方向に設置しており、北と西の相反する設置が興味深い。
- 注4 風張(1)遺跡の報告書では、時期を明示していないため、土器形式の認定は、筆者の判断でおこなった。

《引用参考文献》

- 1 新谷雄蔵(1991)『牛潟(1)遺跡発掘調査概要』車力村文化財調査報告書第2集 車力村教育委員会
- 2 赤羽真由美・神康夫(1999)『十腰内(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第261集 青森県教育委員会
- 3 石野博信(1995)『古代住居のはなし』吉川弘文館
- 4 宇部則保(1988)『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書VII 一丹後平遺跡(2)-』八戸市埋蔵文化財調査報告書第27集 八戸市教育委員会
- 5 遠藤正夫(1990)『弥次郎窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第128集 青森県教育委員会
- 6 岡田康博(1985)『尻高(4)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第89集 青森県教育委員会
- 7 小笠原善範・村木淳(1991)『風張(1)遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第42集 八戸市教育委員会
- 8 小笠原善範(1995)『八戸市内遺跡発掘調査報告書7-坂中遺跡-』八戸市埋蔵文化財調査報告書第61集 八戸市教育委員会
- 9 小笠原雅行(1998)『三内丸山遺跡X』青森県埋蔵文化財調査報告書第250集 青森県教育委員会
- 10 葛西勲・児玉大成(1992)『鞍越・裴川遺跡発掘調査報告書』川内町教育委員会
- 11 木村鉄次郎(1992)『沢堀込遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第144集 青森県教育委員会
- 12 小宮恒雄(1990)『特集古代の住居ー住まいの入り口ー』季刊考古学32号 雄山閣
- 13 更科源蔵(1968)『歴史と民俗アイヌ』社会思想社
- 14 杉山 武(1980)『金木町神明町遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第58集 青森県教育委員会
- 15 鈴木克彦(1986)『上北町古屋敷貝塚II-遺構編-』上北町教育委員会
- 16 相馬信吉(1982)『右工門次郎窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集 青森県教育委員会
- 17 成田滋彦(1980)『大面遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集 青森県教育委員会
- 18 成田滋彦(1985)『大石平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第90集 青森県教育委員会
- 19 畠山昇・岡田康博(1988)『上尾駒(2)遺跡II』青森県埋蔵文化財調査報告書第115集 青森県教育委員会
- 20 畠山昇・中嶋友文(1992)『富ノ沢(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第143集 青森県教育委員会
- 21 畠山昇(1993)『富ノ沢(2)遺跡VI』「特殊施設について」青森県埋蔵文化財調査報告書第147集 青森県教育委員会
- 22 畠山昇・三浦孝仁・成田悟(1993)『野場(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第150集 青森県教育委員会
- 23 福田友之(1983)『鶴窪遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第76集 青森県教育委員会

-
- 24 藤田亮一・宇部則保・村木淳・小笠原善範（1986）『丹後谷地遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集 八戸市教育委員会
 - 25 藤田亮一・宇部則保・村木淳（1988）『田面木平遺跡（1）』八戸市埋蔵文化財調査報告書第20集 八戸市教育委員会
 - 26 藤田亮一（1991）『風張（1）遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第40集 八戸市教育委員会
 - 27 古市豊司・市川金丸・大湯卓二（1977）『水木沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第34集 青森県教育委員会
 - 28 宮本長二郎（1984）『縄文時代の竪穴住居跡』季刊考古学第7号 雄山閣
 - 29 武藤康弘（1997）『住の考古学』「縄文時代前期・中期の大型住居の研究」同成社